

定年@マネー

第3部 保険

①

定年後も安心して過ごしたいと、万が一の備えである保険に加入している人もいるだろう。だが、いま契約している保険は、自分が死んだとき、入院したとき、介護が必要になったとき、頼れる保障内容だろうか。定年@マネー「第3部のテーマは「保険」。第二の人生に見合った保障のあり方を考えたい。

「ほとんど必要のないものに、ずっとお金を払い続けていたんですね」。川崎市に住む横井仁美さん(仮名、57)はそう言っ

て肩を落とした。横井さんは7月、保険の見直しのため、36社の保険商品を取り扱う「ライフプラザホールディングス」の東京・渋谷にある本店を訪れた。相談員に加入している保険の証券を見せたところ、「死亡保険金が多すぎる」と言われた。

横井さんは複数の保険に加入していたが、その中心が定期付き終身保険だった。生涯の死亡保障がある終身保険を主契約にし、そこに掛け捨ての定期保険を特約でつけ、60歳や65歳までといった一定期間内の死亡に高額の保障を上乘せしたものだ。個人保険の保有契約高の36%を占める「定番」商品だ。

横井さんは、終身保険1000万円に定期保険30000万円を上乘せしていた。60歳までに死亡した場合、4000万円の保険金が下りる。

これだけの保険金があると、一家の働き手が死亡した場合で

現役時代と変わる備え

も、配偶者や子どもその後の生活を守ってあげよう。だが、横井さんは一人暮らしで、子どももないため、受取人は父親(81)にしていた。同社相談員の指摘は「高齢の父親に、これほどの保険金はいらぬのでは」ということだった。

「30年ほど前、勤め先に営業に来た保険会社の女性から勧められるがままに入ったので、保障内容がよくわかっていなくて……」と横井さん。相談員の助言に従い、保険を見直した結果、月約6万円だった保険料総額が約3万円に半減した。

同社マーケティング部長の岡本有加さんは「自分の保障内容がよくわからず、保険を掛けすぎているという相談事例は多い」と話す。

東京都在住の会社員、北見健太さん(仮名、58)は、加入している定期付き終身保険(死亡保険金は最大4000万円)に、入院1日につき本人は1万円、妻56なら6000円の給付金

掛けすぎ、保障期間など点検を

が出る医療特約をつけていた。だが、この特約は60歳で切れてしまい、継続するにしても保障は最長80歳までと、保険会社から伝えられた。

保険の見直しなどの相談を手がける「家計の見直し相談センター」(東京)のファイナンシャルプランナー、山田和弘さんは「あまり知られていませんが、定期付き終身保険での医療特約は80歳までしか延長できないものが多い。延長の場合も、その分の保険料は全額前払いか年払いとするのが一般的」と話す。

北見さんの例では、年払いなら毎年10万8000円を20年間、一括だと約200万円の保険料が必要。「こんなに多額だとは思わなかった」と北見さん。

現役時代と定年後とは、必要な保障の本身は変わる。今後の自分にふさわしい保険に見直すには、まず自分がどんな保険に入っているかを確認することが第一歩だ。



横井さん(左)は「もっと早く見直しをしていればよかったですね」と話す(ライフプラザホールディングスで)

ライフプラザホールディングス
<http://www.lifeplaza.co.jp/>
家計の見直し相談センター
<http://www.370415.com/>

くらし 家庭